



タイムズスクエアの2017年夏

夏の出会い

友人らとのカジュアルな集まりで、仕事や思想、性別に関係なくみんなが気軽に参加でき、最もよく話題にあがるのは映画に関することです。最近どんな映画を見たかに始まり、役者と監督について細かく批評する人もいれば、1950年代の日本映画とイタリア映画の素晴らしさを語る人もいて、アメリカでの映画ファン層の厚さを証明しています。また映画に加え、テレビで放映されている長編ドラマも同様に話題に上がります。最近では、衛星ケーブルテレビ放送局HBO毎週日曜日夜9時(東部夏時間)放送の『ゲーム・オブ・スローンズ』シーズン7が人気です。

とはいえ、ニューヨークには舞台作品について熱く語る人たちも存在します。この夏、よく耳にしたのは、ブロードウェイの演劇『インディセント』と『人形の家パート2』、そしてミュージカル『ナターシャ、ピエール・アンド・ザ・グレート・コメット・オブ・1812』です。どれも2017年度トニー賞の作品賞にノミネートされ、『インディセント』のクリスティー・エイカーは演劇照明デザイン賞に、また『ナターシャ...』のブラッドリー・キングはミュージカル照明デザイン賞に輝きました。『人形の家パート2』に関しては好き嫌いがはっきりする点も含め、ニューヨーク・タイムズの批評に書かれていたように、“an endlessly open debate(無限に終わりなき討論)”である人間社会そのものを表現しています。

また私がよく話したのは、リージョナルシアターのトゥーリバー劇場で公演された、ミュージカル『リトルジョーのバラード』についてです。1993年公開の西部劇映画を基にトゥーリバー劇場の芸術監督ジョン・ディアス氏らが制作したオリジナルの

ミュージカルは、『人形の家パート2』でトニー賞演劇照明デザイン賞にノミネートされたジェニファー・ティプトン氏によって照らされました。多くの優秀な照明デザイナーを輩出し続けるアイビーリーグの名門校イェール大学の大学院で照明デザインの教鞭をとるティプトン氏は、言わずもがな巨匠中の巨匠です。この公演が忘れられないものとなったのは、本と音と動きの巧妙さに加えて、照明の力が非常に大きいと感じたところに由来します。あの明かりの素晴らしい点は、観客に照明デザインの存在を忘れさせるところです。私はティプトン氏がどのように場面を設計したか目を凝らしていたのですが、1分もしないうちに照明のことをすっかり忘れて話を伝える役者さんに見入っていました。澄んだ空気のように美味しく過剰な主張のない明かりが、登場人物の感情を包み込みながら物語を前に進めていたため、観客は舞台上で起こっている幻想を信じ架空の人物に感情移入できたのだと思います。

学生時代に社会学を専攻していた少し年上の友人を含めてランチをしていたとき、彼女が一番好きな映画にアニメを実写化したアクション映画を挙げました。勉強家で社会の問題とどのように向き合うべきかを語る彼女なので、少し難しい映画の名前が彼女の口から出るのではと予想していた私たちが良い意味で裏切りましたが、「恋人が死んで、彼のお葬式の後に家に帰りたくなくて、一人で足を運んだ映画館で観た」と続ける彼女に、私たちは息を飲みました。映画もドラマも舞台も、人との出会いのように、出会うことで人生が変わる作品があります。そのような作品づくりに関わり続けることができたなら良いなと感じました。